

よもやま話に花が咲く。えきんぐらがお届けする小ネタ袋。

# 蔵通信 三一號

2012.8

## 絵 金 百 話 シリーズ 第三十話 祭離子のその後に

発行：絵金蔵運営委員会  
発行日：2012年8月1日  
〒781-5310  
高知県香南市赤岡町538  
Tel.Fax 0887-57-7117  
ekingura@mxi.netwave.or.jp  
<http://www.ekingura.com/>



## INFORMATION

### 香南市絵金生誕200年記念事業－極彩の闇－ 記念式典のご案内



絵金の誕生日日前日に当たる9月30日、生誕200年を祝う記念式典を開催いたします。土佐絵金歌舞伎伝承会による、絵金が町絵師として活躍するまでを描いた創作歌舞伎の上演などを予定。皆さまお誘いあわせの上、ぜひご来場ください。

日時：平成24年9月30日(日)  
開演 14時半 開場15時  
歌舞伎「新絵金伝説」一時を超えて、絵金さんお殿様に会うの段、餅投げ等  
場所：弁天座(香南市赤岡町) 入場無料  
お問い合わせ：弁天座(Tel 0887-57-3060)

### コーナー企画展

#### 【絵金—200年の想い—】開催中！

今年7月より、絵金蔵「蔵の穴」展示室に新しい展示ケースを設置いたしました。これまでの常設展示ではご覧いただけなかった、多彩な絵金作品の魅力、込められた想いをご紹介いたします。

会期：平成24年7月24日～平成25年3月31日

\*会期中展示替えあり



### 極彩の闇、再び

高知県立美術館

★大絵金展－極彩の闇－

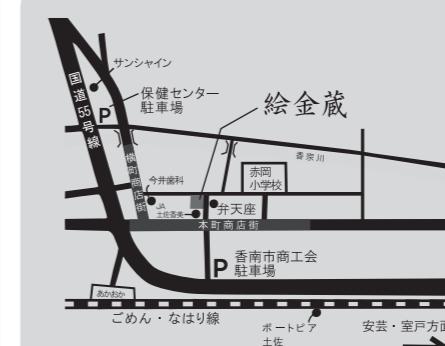
平成24年10月28日(日)～12月16日(日)

香美市立美術館

★絵金とその時代展－闇からの伝承－

平成24年11月10日(土)～12月16日(日)

**【絵金蔵】**  
開館時間  
午前9時～午後5時  
(入館は午後4時半まで)  
観覧料  
大人500円 高校生300円  
小・中学生150円  
(15名以上の団体は各50円引き)  
休館日  
毎週月曜日  
(月曜が祝日の場合は火曜)  
12月29日～1月3日



幕末土佐の芝居絵師・金蔵（通称・絵金）。彼は土佐各地の祭礼に多くの芝居絵屏風を残しました。絵金蔵は、平成17年2月、赤岡の地に残る23点の芝居絵屏風を収蔵・保存するために作られた施設です。

絵金蔵の三つの使命  
：伝承  
：地域を超えて  
：年に一度  
：縁結び  
：次世代へ  
：文化を守るために  
：伝えるため  
：世代を超えて

第1回

復活

香南市絵金生誕200記念事業

# えくらべ展がで・き・る・まで

昔は各地区から  
持ち寄った芝居  
絵を競わせてそ  
の年の豊作や繁  
盛を占っていた  
そうだニヤ。



須留田八幡宮神祭と絵金祭りが行われた7月14・15・21・22日、赤岡町商店街を中心に、現代作家の屏風作品13点を絵金屏風と同時に飾る、「第1回えくらべ復活展」を開催いたしました。多くのボランティアの協力による、手作り展覧会の裏側をちしき紹介いたします。

大賞は来場者による投票で決定。



20年以上前から絵金の表現を作品に取り入れてきた美術作家・玉造義隆さん。その頃からすでに、赤岡の町で絵金と現代美術を共に並べるという構想を語っていました。本展を行うにあたり、様々な助言と共に「あんたらがやらないかん」とハッパをかけていただきました。

えくらべ出品作品ができあがった頃の玉造さんのギャラリー兼アトリエ(タマリ館)

## えくらべ大賞

第1回えくらべ復活展大賞  
梅木雅子《ru-fu》(第1位 367票)

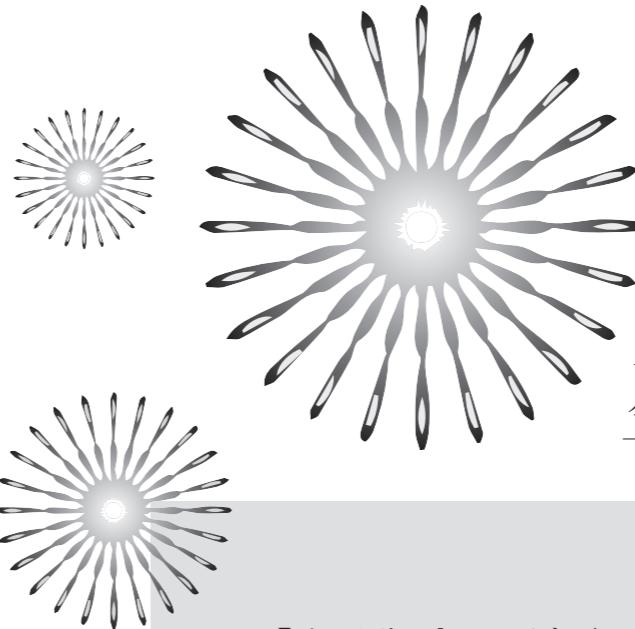
こちらに語りかけるような少女の表情、見る角度や光によって様々に色を変えるワンピースの美しさ、夜の闇と蝋燭の灯りが作品をいっそう幻想的に輝かせました。年配の方から子どもまで、幅広い年代の票を集めました。



香南市絵金生誕200年記念事業  
実行委員会賞

大石真由佳《熱血オリンピック》  
巷で話題のオリンピックと絵金屏風の登場人物たちがコラボした楽しい作品。地元のメンバーから「昔と今の交錯が面白い」「細かい部分までよく遊んでおり、観る者を楽しませる精神は絵金に通ずる」などの評価を得て、受賞となりました。

## 実行委員会賞



# 絵金百話

第三十話 祭囃子のその後に

まつりばやし たじまちょう だんしちうちのだん

なつまつりなにわかがみ 夏祭浪花鑑 田島町団七内の段

## 概要

『夏祭浪花鑑』は、延享2年(1745)7月、大阪・竹本座で全9段からなる世話物の人形淨瑠璃として初演されました。並木千柳・三好松洛・竹田小出雲による合作、山車の登場やだんじり囃子の音楽、本物の泥や水を使う演出など、夏狂言の代表作として上方・江戸双方で様々な演出が練り上げられた芝居です。

元禄9年(1696)頃、魚売り団七が舅を殺すという事件が実際に起きました。この事件はすぐに歌舞伎に脚色され、その後も「宿無し団七」の狂言として団七はじめ、本作に登場する一寸徳兵衛、釣船三婦といった役名が定着していました。そこへ延享元年(1744)大阪・長町裏(現在の大坂市日本橋付近)で再び魚屋が殺人を犯します。これらを踏まえて書き下ろされた『夏祭浪花鑑』は、これまでの団七ものの決定版となりました。

さて、本作の序幕は大阪・住吉神社の鳥居前、老侠客・釣船三婦が堺の魚屋団七九郎兵衛の女房・お棍と息子市松を連れやって来るところからはじまります。魚屋ながら侠気溢れる団七は喧嘩沙汰を起こして入牢していましたが、主筋である玉島兵太夫の配慮から牢より出られることになり、三婦たちが迎えにきたところでした。団七はその恩に報いるため、命に代えても兵太夫の子息・磯之丞の力となることを誓います。その後、磯之丞の恋人・傾城琴浦をめぐり一寸徳兵衛と喧嘩になりますが、互いの主筋が兵太夫と分かると二人は義兄弟の縁を結びます。

賑やかな夏祭りの夜、団七はかくまっていた琴浦を誘拐し、金に換えようとするお棍の父・三河屋義平次から琴浦を救います。しかし、逆上した義平次は雪駄で団七の眉間に割ったあげく激しく罵り続け、耐えていた団七ははずみで斬ってしまったのを機にやむなく舅を殺害、長町裏の池に死体を捨てその場を逃れます。三婦と徳兵衛の配慮により妻子を離縁し、一旦は逃げる団七ですが、磯之丞の帰参が許されたことを知ると、大人しく捕縛されます。磯之丞は恩ある団七を救うことを決意するのでした。

今回ご紹介する『夏祭浪花鑑 田島団七内の段』は香南市・深渕神社に奉納され、文字通り夏祭りに飾られていた作品です。描かれているのは今日一般に上演される「住吉前」「三婦内」「長町裏」ではなくその後の場面、義兄弟・団七を救う方便としてお棍に言い寄った徳兵衛と、怒った団七が今まさに斬り合おうとにらみ合い、三婦が身体を張って止めに入った瞬間が描かれています。社会の底辺にありながら、わが身を顧みず義理と人情に生きる熱い男たちの生きざまに、土佐の庶民たちも共感、熱狂したに違いません。今回もどうぞお楽しみください。



# 絵金を、読む。

## なつまつりなにわかがみ 夏祭浪花鑑 田島町団七内の段

二曲一隻屏風/紙本着色/161.0×177.0cm  
香南市・武内昭氏蔵

### ■ サアいっそ内儀を 俺にくれるか。

我が身を捨てても義兄弟を守ろうとする一寸徳兵衛。その思いを知っても、団七は大恩ある人の子・磯之丞を無事帰参させるまでは、と真相を語りません。仕方なく自分がお梶に惚れていたという筋書きで、一芝居打つことになりました。

### 取り囲む捕方

団七たちが別れに涙する中、大勢の足音や声が聞こえます。「まず団七を捕まえるか、それとも逃げ道をふさぐか」という相談が聞こえる中、徳兵衛の機転により団七は徳兵衛の故郷・備中玉島で落ち合うことを約束し、屋根伝いに逃げるのでした。

### ■ 堪忍ならざ俺を斬れ！

一部始終を見守っていた釣船三婦。いよいよ喧嘩となり、団七・徳兵衛の間に割って入ります。「世界に堪忍のならぬといふは、腹寒いより外堪忍のならぬ事はないものぢや」と諭し、団七に離縁状を書かせます。

\*頭に付けているのは菅笠の台。

### ■ 気を揉みあせれど女業。

あらかじめ口裏を合わせてあったとはいえ、二人の権幕に気を揉む団七の妻・お梶。団七の気性をよく理解し、自分の父を殺したのは「よくよく腹の立つことがあっての事」、父の敵と憎むよりも、その身の上を案じるのでした。

### ■ ちつとの間の懇であったなア。

徳兵衛の涙ながらの説得に耳を貸さなかつた団七。しかし、女房を口説かれでは話は別、徳兵衛の芝居を本気と思いこみます。ちなみに、この着物の大膽な格子柄は、団七縞と呼ばれ、庶民にも流行しました。



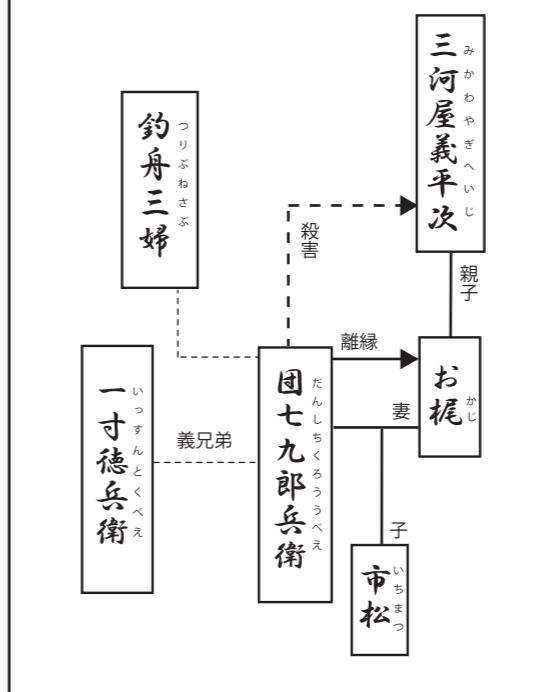
#### 物語る小道具 ～約束の片袖～

団七と徳兵衛が義兄弟のしろしに取り交わした襦袢の片袖。喧嘩の前、心置きなく争えるようお互いちりぎりに引き裂いてしまいます。

#### 物語る小道具 ～裁縫箱～

徳兵衛の着物の綻びを縫うため、お梶が使っていた裁縫箱。徳兵衛は「いつ見ても美しい御面相」と言い寄り「コレ悪いことさんすと針で突くぞ」と言われても、構わずお梶に抱きつき、喧嘩のきっかけを作ります。

## 夏祭浪花鑑 主要登場人物



### 県下各地の『夏祭浪花鑑』

高知県下に残る『夏祭』。いずれも団七内の段ですが、お梶に言いよる徳兵衛を描いたり、前段の舅殺しの場を背景に配するなど本作と構図は異なり、筆致もまた同一作者によるものではなさそうです。いずれにしても、小物や表情はしっかりと描き込まれており、制作者たちはこの芝居をよく理解していたことが伺えます。

どっこいさせぬはこりやさせぬとして  
彼方を突抜け此方を跳ねしてこい  
止めたと支へたり。

[参考文献]

『淨瑠璃名作集 下』日本名著全集江戸文芸之部 第7巻 日本名著全集刊行会編 1929年2月  
『野市町史 下巻』野市町史編纂委員会 1992年1月  
『歌舞伎辞典』平凡社 1983年11月

『第二十四回 四国こんびら歌舞伎大芝居』松竹株式会社 2008年4月  
『文楽ハンドブック 改訂版』株式会社三省堂 2003年3月

### — あらすじ —

三河屋義平次殺害の犯人探しが進む中、団七九郎兵衛の家に義兄弟・一寸徳兵衛が帰郷の挨拶にやってくる。殺害現場で団七の雪駄を拾った徳兵衛は、団七が犯人だと気づいており、共に故郷へ行かないかと提案するが、団七は断る。舅殺しは重罪のため、徳兵衛は団七の妻・お梶や息子・市松の今後を心配し、団七の身代わりに逮捕される覚悟がある、相談してほしいと涙ながらに伝えるが、団七は真相を語らず奥へ入ってしまう。

部屋に入ってきたお梶が徳兵衛の着物の綻びを見つけ修繕していると、徳兵衛は突然お梶を口説きはじめ不義を迫る。それを障子の陰から覗いていた団七は怒り、二人が刀で打ち合いをはじめたその時、仲間の老侠客・釣舟三婦が喧嘩を止めに駆け込んでくる。怒りが収まらない団七に、三婦はさらりと女房をあげるのが男だと説得、団七に離縁状を書かせ、お梶と市松を無理に連れ家を出していく。

実は三婦らは、団七とお梶が離縁すれば舅殺しの罪が妻子に及ぼぬと考えたのだった。市松の父を慕う姿や辛い心情を話すお梶の声が団七にも聞こえ、各々が別れに涙する。

しかしながらその時、既に捕方が団七の家を取り囲んでいた。徳兵衛は捕縛の役目を買って出て、団七を捕らえると見せかけ路銀の金を渡し逃がしてやるのだった。